

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：23302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2014

課題番号：23660073

研究課題名(和文)妊婦のセルフケア行動を促進する要因の検討とガイドラインの作成

研究課題名(英文) Factors promoting self-care actions of pregnant women and the development of a guideline

研究代表者

曾山 小織(高野小織)(Soyama, Saori)

石川県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：10405061

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、妊婦健診における妊婦のセルフケア意識を高める医療者の関わり方を明らかにすることである。妊婦健診時の妊婦と医療者の会話のやりとりを観察調査、妊婦のセルフケア行動を促進するための医療者の意識を面接調査、医療者の保健指導に対する妊婦の意識を面接調査した。その結果、医療者は妊婦にセルフケアを意識づけるため妊婦に自己評価を毎回尋ねていた。医療者は妊婦にセルフケア行動の有無だけではなく、考え方を知るように会話を展開していた。妊婦は妊婦健診毎に自己評価を尋ねられることでセルフケア行動を意識づけられていた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to identify health care professionals' involvement during prenatal check-ups that can increase self-care awareness of pregnant women. We conducted: an observational survey to investigate conversations between pregnant women and health care professionals during prenatal check-ups, an interview survey on health care professionals attitudes towards the promotion of self-care actions for pregnant women, and another interview survey on pregnant women's awareness of guidance provided by health care professionals. As the results, health care professionals had asked pregnant women to evaluate themselves at each prenatal check-up to help them become aware of self-care actions. They had investigated not only the presence or absence of self-care actions in pregnant women, but also their attitudes towards self-care in conversation. The awareness of self-care actions was maintained in pregnant women by performing self-evaluation at each prenatal check-up.

研究分野：医歯薬学

キーワード：セルフケア 妊婦健診 医療コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

わが国では晩産化・少産化の傾向で女性の出産体験が貴重になっている。国は母子保健に関する国民運動計画「健やか親子21」の一つとして、出産に関する安全性と快適性の確保を目指している。出産の快適性は産婦の満足感で示され、妊娠期からのセルフケアに影響すると言われている。妊娠期からのセルフケア意識を高め妊婦自身が健康に留意することは、母親意識を高め、産後は母子の愛着形成を促進する(眞鍋ら、2005;竹原ら、2009)。また、妊娠経過や出産経過の異常を予防して、さらに胎児の子宮内環境を良好に保ち、胎児の発達のみならず子どもの将来の成人病予防にまで影響する(Developmental Origins of Health and Disease : DOHaD)。

妊婦にセルフケアを促す機会として定期的に行われる妊婦健康診査(以下、妊婦健診とする)は有用であると考える。医療者が妊婦とコミュニケーションを取り妊婦の自己決定を支援することで、妊婦のセルフケア行動を啓発して、また医療者への信頼関係を構築する。妊婦健診の診療場面における妊婦と医師との相互行為(西阪ら、2008)は明らかにされているが、妊婦健診とセルフケア促進の関係は国内の報告がみられない。

そこで、本研究では妊婦健診において妊婦のセルフケア行動を促進する医療者の関わり方を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の目的

- (1) 妊婦健診における妊婦と医療者の会話のやりとりを妊娠中期・後期で明らかにする。
- (2) 妊婦のセルフケア行動を促進するための医療者の意識を明らかにする。
- (3) 医療者の保健指導に対する妊婦の意識を明らかにする。

3. 研究の方法

(調査1) 質的因子探索研究

目的：妊婦健診における妊婦と医療者の会話内容を妊娠中期・後期で明らかにする。

対象：施設は妊婦が妊婦健診日以外に運動目的で来院している1施設である。この施設では、医師が妊婦の初診時に、分娩はリスクを伴うため安全な出産には妊娠期間中のセルフケアが重要だと説明している。対象者は同施設の女性医師1名、助産師6名、および調査期間中に初診で受診した初妊婦6名である。流産が減少する時期(妊娠16週以降)に参加協力の依頼を行い、同意が得られた妊婦を対象とした。

データ収集方法：妊婦健診の問診場面の録画と参加観察を妊娠20週以降から38週まで1か月毎に合計3回から4回実施した。

分析方法：録画した会話データを逐語録に起こし、セルフケアに関連する語りを抽出し、本質的な意味内容を損なわないように要約して共通内容をまとめた。

(調査2) 質的因子探索研究

目的：妊婦のセルフケア行動を促進するための医療者の意識を明らかにする。

対象：調査1と同施設の助産師外来を担当する助産師6名である。

データ収集方法：妊婦のセルフケア行動を促進するために助産師が実践している方法、および妊婦に関わる時の助産師の思いについてインタビューガイドを用いた半構造化インタビューを行った。

分析方法：得られたデータから逐語録を作成して、セルフケアを促進するための実践内容と根底にある思いを抽出し、類似性を考慮しながらカテゴリとサブカテゴリに分類した。

(調査3) 質的因子探索研究

目的：医療者の保健指導に対する妊婦の意識を明らかにする。

対象：調査1と同施設に運動目的で来院した

妊娠末期の初妊婦 3 名、経妊婦 3 名の合計 6 名で、調査 1 の対象者と異なる対象者である。データ収集方法：医療者の保健指導に対する妊婦の思い、および医療者の保健指導が妊婦のセルフケア実践に影響しているかインタビューガイドを用いた半構造化インタビューを行った。

分析方法：得られたデータから逐語録を作成して、セルフケアに関する内容を抽出し、意味合いを考慮しながら分類した。

4. 研究成果

(調査 1)

研究対象者と妊婦健診の問診場面の概要

初妊婦 6 名の年齢は 24 歳から 34 歳までが 3 名、35 歳から 45 歳までの高齢妊婦が 3 名であった。6 名のうち 1 名が録画の一時停止を希望した回があったが、次の妊婦健診から調査に再参加した。データ収集した 3 回から 4 回の妊婦健診のうち、妊娠 20 週から妊娠 28 週で助産師の妊婦健診が 1 回あり、それ以外は医師の妊婦健診であった。1 回の妊婦健診の所要時間は助産師が約 30 分間、医師が約 15 分間であった。

録画と参加観察の結果

助産師や医師は妊婦健診毎に妊婦に食事や運動の自己評価を尋ねていた。医療者は妊婦の回答だけではなく表情や間合いを判断して、セルフケアに取り組む姿勢や精神状態を引き出すよう詳細に尋ね、会話を展開していた。セルフケアに関連する会話の内容は食事、運動、体重増加、合併症の予防、またはマイナートラブルへの対処であった。合併症では妊娠高血圧症候群、貧血、または早産などで、マイナートラブルはつわり、腰痛や膝痛、便秘、または下肢の浮腫などの内容であった。食事では前日の摂取内容を尋ねたり、運動では実施した種類や時間の長さを尋ねて、運動の実践やバランスの良い食事摂取は体重増加、合併症、またはマイナートラブル

の予防や改善になると説明していた。妊婦は助産師や医師の説明にうなずくときや、作り笑いをするときもあるが、次の妊婦健診では食事や運動を実践して体調の変化を感じたと答えていた。

助産師や医師は妊婦健診毎に妊婦にセルフケアの実践内容を繰り返し確認してセルフケアを意識づけようとしていた。また、セルフケアに取り組む姿勢や精神状態を引き出すよう詳細に尋ね、会話を展開していた。

(調査 2)

助産師が妊婦にセルフケアを促すときの根底にある思いを分析したところ、助産師の妊婦に対する思いでは「生涯健康に過ごしてほしい」、「妊娠中から子育てを家族で感じてほしい」が抽出された。保健指導時に助産師が実践している方法は、妊婦と先ず「人間関係をつくる」ために妊婦を尊重した態度で接し、計測診で妊婦に触れた時に、妊婦の緊張をほぐす目的でタッチケアにつなげている助産師もいた。「妊婦の身体的および精神的な健やかさをみる」ことで妊婦の個別性に対応した指導を行おうとしていた。食事に独自の考えがある妊婦には楽しんで食事しているか確認して、忙しさを理由に実践していない妊婦には自らの傾向に気づくように関わり、セルフケアを促す程度は妊婦の個別性に合わせていた。助産ケアの評価は妊娠経過をカルテで確認すること、妊婦健診時に妊婦と話すこと、および外来受付を含めた医療チームで情報交換を行い「妊婦のセルフケア実践の変化をみる」ことで評価していた。

妊婦にセルフケアを促す助産ケアの要素は一生の健康維持や妊娠期から子育ての自覚を促す働きかけであり、周産期の心身の健康増進だけに視点を置いていなかった。セルフケアを促す程度は妊婦の個別性に合わせていた。

(調査3)

医療者の保健指導に対する妊婦の意識を分析したところ、妊婦は保健指導されること自体を医療者から健康状態に関心を寄せてもらっていると思っていた。妊婦はセルフケア実践の有無を毎回尋ねられることに対して負担を感じておらず、セルフケアの必要性を意識づけられていた。妊婦は保健指導に関して医療者と会話することで、医療者の人柄を知ろうとしていた。今回の調査では各妊婦への保健指導内容とその後の経過はわからなかったが、妊婦は医療者の保健指導に対して独自の解釈を行いセルフケア実践の程度を決めていた。

以上の調査結果から、

(1)妊婦健診における妊婦と医療者の会話では、医療者は妊婦に食事や運動に対する自己評価を妊婦健診毎に尋ねて、セルフケアを意識づけようとしていることが明らかになった。また、医療者は妊婦の回答そのものではなく、妊婦がセルフケアに取り組む姿勢や精神状態を引き出すように会話を展開させていることも明らかになった。しかし、医療者の問いに対する妊婦の回答からはセルフケアを実践しているかまで明らかにできなかった。

(2)妊婦のセルフケア行動を促進するための医療者の意識では、妊娠中の健康だけを目標にするのではなく<生涯健康に過ごしてほしい><妊娠中から子育てを家族で感じてほしい>という思いを根底に持ち会話を展開していることが明らかになった。また、妊婦健診中に助産師が実践していることでは<人間関係をつくる><妊婦の身体的および精神的な健やかさをみる>ことを意識しており、<妊婦のセルフケア実践の変化をみる>ことで意識づけの評価を行っていることが明らかになった。セルフケアを促す程

度は妊婦の個別性に合わせていた。

(3)医療者の保健指導に対する妊婦の意識は、毎回の妊婦健診でセルフケアの自己評価を尋ねられることで、医療者から健康状態に関心を寄せてもらっていると感じていることが明らかになった。セルフケア実践の程度は妊婦個々で異なっていた。インタビューでは、妊婦が妊婦健診毎にどのような保健指導を受けて、どのようなセルフケアを実践したか、妊娠経過中の変化を明らかにできなかった。

今回の妊婦健診場面の縦断的観察は、研究者が介入しない方法で調査を行った。今後は、妊婦健診後に妊婦と医療者にセルフケアに関する内容をインタビュー調査して、さらに妊婦のセルフケア実践の内容や程度について縦断的变化を検討する必要があると考える。

<参考文献>

眞鍋えみ子、清水尚子、松田かおり、中尾真理子、福島克子、中村みのり、上野範子、妊娠中のセルフケア行動が出産体験の自己評価に及ぼす影響、京都府立医科大学看護学科紀要、Vol. 14、2005、pp. 37-42

西阪仰、高木智世、川島理恵、女性医療の会話分析、文化書房博文社、2008

竹原健二、野口真貴子、嶋根卓也、三砂ちづる、出産体験の決定因子 出産体験を高める要因は何か?、母性衛生、Vol. 52、No.2、2009、pp. 360-372

5. 主な発表論文等

[学会発表](計2件)

Saori Soyama, Kazue Yoshida, Masayo Yoneda: Midwifery care promoting health-related behaviors among pregnant women, The ICM Asia Pacific Regional Conference, 2015.07.21 (発表予定), Yokohama.

Saori Soyama, Kazue Yoshida, Masayo Yoneda : Interaction between medical workers and pregnant women in prenatal check up , ICM 30th Triennial Congress , 2014.06.03 , Prague .

6 . 研究組織

(1)研究代表者

曾山小織 (SOYAMA , Saori)

石川県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号 : 1 0 4 0 5 0 6 1

(2)研究分担者

米田昌代 (YONEDA , Masayo)

石川県立看護大学・看護学部・講師

研究者番号 : 8 0 3 2 6 0 8 2

吉田和枝 (YOSHIDA , Kazue)

石川県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号 : 5 0 3 5 3 0 3 2

金谷雅代 (KANAYA , Masayo)

石川県立看護大学・看護学部・講師

研究者番号 : 8 0 4 5 7 8 8 7